

平成22年度 学校と美術館の連携活性化事業

「アート・トラベリング・トランク」の開発・作成

「岡山県立美術館 学校と美術館の連携委員会」では、平成22年度、文化庁と美術館連絡協議会から助成を受けて「学校と美術館の連携活性化事業」に取り組みました。この事業は、これまで培ってきたネットワークの一層の活性化を目指して「ハブ教員(通称:ミュージアム特使)^{※1}」の養成に取り組み、地域連携強化に取り組むことを目的としています。

具体的な方策として、以下3つの事業を実施しました。

- 1] ハブ教員研修
- 2] ハブ教員による各地域の学校への普及活動
- 3] 小中学生が岡山の美術に親しむための教材の開発・作成

ハブ教員に対する研修とハブ教員自身による各地域の学校への普及活動を有機的に関連づけながら、具体的な成果物となる、小中学生が岡山の美術に親しむための教材「アート・トラベリング・トランク」の開発・作成を進めました。

「アート・トラベリング・トランク」の開発・作成は、当館が推進している「主体的に“みる”鑑賞」の分野と、当館のコレクションの特色をなす「備前焼」「水墨画」の分野に関して実施し、主体的に「みる」体験、素材や道具に「くさわる」体験や実際に「描く・つくる」体験を通した、鑑賞および表現活動を支援することができるようパッケージ化を行いました。

内容は以下の通りです。

＜みるツール編＞

- CD「県美30画像」
- 図版(B2 24作品)等
(内12作品は、アート・ゲーム「〇×クイズ」に活用できる。)

＜備前焼編＞

- DVD「備前焼の現在・過去・未来」
- 備前焼をより深く知るセット 等
・湯呑み(備前焼・萩焼・有田焼)
・備前焼窯変と土土(ひよせ)

＜水墨画編＞

- DVD「水墨画の現在・過去・未来」
- 「布袋竹雀枯木翡翠図」宮本武蔵
(3幅対・掛幅実物大複製)等

また、「アート・トラベリング・トランク」は、現場での試作活用がすでに試みられ各地域への普及も始まっています。平成22年度は、県内小中学校4校^{※2}にご協力をいただくことができました。



【学校におけるくみるツール編>実践】



【中学校におけるくみるツール編>実践】



【中学校におけるくみるツール編>実践】



【中学校におけるくみるツール編>実践】

平成23年度は、拠点校を中軸とした連携の常態化を目指した取り組みを行っていくとともに、他の美術館や他の学校種・社会教育機関へのネットワーク拡大を視野に入れて、「学校と美術館の連携活性化事業」を通じて地域社会における当館の活動基盤を整えていく取り組みにつなげていきたいと考えています。

※1 「ハブ教員(通称:ミュージアム特使)」とは、岡山の美術を教材とする授業づくりに興味・関心を持ち、美術館と学校それぞれの役割について理解を深め、よりよい連携のあり方を考えながら、教材開発と実践・普及活動を積極的に行う教員であり、岡山県内の各地域で連携の中軸(ハブ)となる人材です。

※2 和気町立山田小学校(岡村彰紀教諭)、岡山市立福南中学校(武本賢治教諭)、倉敷市立真備中学校(井口 敬教諭)、赤磐市立高陽中学校(土師巨弘教諭)

【教育普及担当 岡本裕子】

平成23年度 展覧会スケジュール(3月～7月)

特別展

2月25日(金)～4月10日(日)
6月1日(水)～7月10日(日)

モネとジヴェルニーの画家たち
横尾忠則展 絵人百九面相

編集後記

美術館ニュース92号をお届けいたします。編集のしめきり間近の3月11日夕方に東北地方太平洋沖地震の報道に接しました。未曾有の規模と言われる今回の地震で被災された皆様にご心配をお見舞い申し上げますとともに、一日でも早く復興がかないますよう心よりお祈り申し上げます。本当に皆様と助け合い、できることから応援していきたいと思っております。

【O.M.】

美術館ニュース 第92号

発行：2011年3月

発行者：岡山県立美術館
〒700-0814 岡山市北区天神町8-48
TEL：086-225-4800
E-Mail kenbi@pref.okayama.lg.jp



児島虎次郎「水仙を持つ少女」

特別展

横尾忠則展「絵人百九面相」

2011年6月1日(水)～7月10日(日)

横尾忠則氏のアトリエは、東京の清閑とした住宅街を分け入ったその奥に佇んでいる。磯崎新氏の設計によるこの画家の創作の場は、ソファの置かれた窓辺は木々に包まれ、柔らかな木漏れ日そこから射し込み、心地良い日だまりを画家の休息に与えてくれているようだ。一方の壁は膨大な書籍に埋め尽くされ、床の多くは画材道具に覆われ、さらに他方の壁には「完成」とも「未完」ともつかぬ絵画が幾重にも並べられていて、この希代の画家の思考とその発露が今もなお無尽蔵に迸っている様がひしひしと伝わってくる。そんな抗し難い魅力に溢れたアトリエを、この六月から開催する展覧会の打合わせのために何度か訪ねる機会が幸運にもあった。



横尾忠則氏 アトリエにて、制作途中の絵画とともに

実は、かつて私が勤務していた二つ

の美術館でも横尾氏の個展がそれぞれ開催されており(「冒険王・横尾忠則」世田谷美術館、2008年/「未完の横尾忠則」金沢21世紀美術館、2009年)、他に類を觀ないその無尽蔵な創作意欲と、着想の変幻自在なありさまに圧倒されていた次第である。そして今、不思議な縁で自分がそんな作家の展覧会を担当する機会に恵まれ、さてどうしたものかと着任早々から与えられたこの大きな責務に頭を悩ましていた。

そんな中、横尾氏から思いもかけないリクエストを頂いたのは、去年の秋口のことであった——今まで色々な展覧会をやってきたが、今までになく本展では全部自分で作品を選んでみたい。これまでになかったような僕のさまざまな姿や作風を見せたいんだ。展覧会名は「絵人〇〇面相」でどうだろう。〇〇には出品数を入れるんだ——

何と言う機智に富んだ、かつ本人からしか出せないアイデアだろうか。ということで本展では、今までにない「画家・横尾忠則」の真の姿を一堂に会する機会を設けることができた。そこには滝やY字路そして冒険小説をモチーフとしたすでによく知られるシリーズは勿論のこと、作家自らの選定により未発表作や長らく出品されることなかった作品、そして彼が大きなテーマとして掲げる「未完」の作品に加筆した「新作」などが含まれる。さらには従来の油彩のみならず、カンヴァスや印刷物による多彩なコラージュ作品、陶板による大型作品、テクナメーションという技術を応用した作品など、全ての作品一つ一つがまったく異なる“顔”を持つ。あわせて描き下ろしの新作も展示される予定であり、近年旺盛に行なわれている展示室での公開制作も含めて、今なお広がり続けるこの画家の世界を肌で感じる機会となるはずである。

思えば絵本『宮本武蔵』を描き写した幼少時代に始まり、若かりし頃に手がけたポスターの数々、寺山修司の舞台美術の担当や大島渚などによる映画への出演、そして画家宣言をへてなお旺盛に活躍を続けるというまさに八面六臂の人生と活躍は、江戸川乱歩のかの有名な少年向け探偵小説「怪人〇〇面相」の名を借りるにふさわしい「絵人」そのものと言えるだろう。この展覧会が、この画家の広大な活動の一端をしかと感ずるまたとない機会となれば幸いである。

【学芸員 高嶋雄一郎】

テキスタイルって面白い!? CULTEX

当館では、2010年12月21日から2011年1月30日まで、「CULTEX 共通言語としてのテキスタイルー共振する思考ー」と「織る・編む・ひろがる 現代テキスタイルの形と色」というふたつの展覧会を開催しました。毎年、秋には日本伝統工芸展を開催しているため、伝統的な着物や帯、紬織や友禅染といった染織作品には馴染みがありますが、ファイバーアートあるいはテキスタイル造形と呼ばれるような作品を紹介するのは本展が初めてでした。出品作家と準備を進める中で、「テキスタイル」という言葉を「染織」と表記するかどうかでずいぶん悩みました。案の定、展覧会が始まると「テキスタイルって何ですか?」という質問が相次ぎましたが、「染め」「織り」だけではない現代の造形表現としての「テキスタイル」を「テキスタイル」という言葉とともに浸透させたい、という作家の強い思いがありました。展覧会で見ていただいたものが「テキスタイル」というわけですが、人がいかに言葉にとらわれるか、感じた次第です。



戸矢崎満雄公開制作
戸矢崎さんの指示に従い、大学生を中心とするボランティアがボタンを並べる



WSフェルティングでつくる
色とりどりの羊毛を石けん水でフェルトにしている

では、「染織」という言葉からどんなものや事柄が想像されるでしょう?糸や布を使ったもの。素材だけでも絹や木綿、ウールなどの天然繊維、ナイロン、ポリエステルなどの合成繊維、「織維」というと紙や木、グラスファイバーから金属まで、硬軟多岐に広がります。それらを加工する技法や構造、できあがった形や色、用途や目的、社会的な意味へと思考を深めていくと、いかに多様なものが内包されているかに気がつきます。展覧会では、繊維素材の特性のみならず、身近な衣服から社会環境まで私たちを取り巻くさまざまなものが「テキスタイル」という言葉によって解釈され、作品として提示されました。いずれの作品も、美術館の空間を大きく使って配置し展覧されるいわゆるインスタレーションと呼ばれるものですが、実にコンパクトに収納されました。そこに「布」本来の「ひろげる」「たためる」という機能性を見て取ることができるでしょう。中古ボタンのインスタレーションを手がける戸矢崎満雄さんは、「ボタンをモザイクのように固定してしまったら、テキスタイルじゃないよね」と言います。再利用でき、展示空間に合わせて自在に姿を変えることができる「布」=「テキスタイル」は、「エコ」な現代にふさわしい美術かもしれません。また、出品作家の協力を得て「さわってみよう あそんでみよう」というタッチングコーナーを設けたり、テキスタイル素材に親しむワークショップを開催しました。さまざまな素材に触れることによって肌感覚（触感）で「テキスタイル」の心地よさを感じてもらえたのではないかと思います。

作品には、現代社会を取り巻く問題を注視したものもありました。「テキスタイル」とは、実は私たちにとってとても身近なものであるということがもっと意識され、「テキスタイル」がより美しく豊かな表現を生み出すことができたなら、私たちを取り巻く環境や社会も美しく豊かなものになるのではないかと、思いました。展覧会を通して、素材の多様さ、形や色の面白さ、テキスタイルの楽しさを感じ、作家たちの今後の活躍が期待されるものでした。

【学芸員 福富 幸】

織る 編む ひろがる テキスタイルの形と色

児島虎次郎

「水仙を持つ少女」

大正五年（一九二六）作 縦二六二〇×横二一三八mm

明治14（1881）年に岡山県川上郡川原村現在の高梁市成羽町に生まれた児島虎次郎は、明治34（1901）年に上京して白馬会研究所に学び、翌年、東京美術学校西洋画科に入学した。卒業後、明治41（1908）年に大原孫三郎の援助により渡欧する。当初フランスで制作していたが、翌年ベルギーに移り、ゲント王立美術アカデミーでベルギー印象派を学んだ。帰国後は倉敷の酒津にアトリエを構えて制作しながら、大原孫三郎の要請により大正後期に一度渡欧し、後の大原美術館のコレクションの基礎となる絵画蒐集に奔走した。

本作は酒津のアトリエの庭にモデルを据えて描いたものである。水仙を手にした着物姿の少女が大きな庭石の上に座っている。背景には水仙や梅などの花々が咲き乱れ、春の雰囲気が明るい光の表現によつて伝えられている。リュニスム光輝主義とも称される、光溢れる画面を特徴とするベルギー印象派を習得した虎次郎の作風をよく伝える作品である。

【学芸員 樺村直樹】

収藏品管理システムについて

図書館のオンライン蔵書検索の便利さを実感する方は多いのではないのでしょうか。行く前にあらかじめ番号を調べたり、借りに行ったけど貸し出し中だったと無駄足をふむこともない。それから参考文献のリストを作ったり、改訂版があるか、同じ著者であれば最新の研究が出たかなと調べたりする、そういったある程度のことが自宅にいながらでも出来てしまいます。インターネットを通じての情報収集は、(100%の人が必要としているとまでは言いませんが)いまや生活に欠かせないものになりつつあります。

ということで、各地の美術館施設でも、収蔵する作品についてオンラインで検索できる館が多くなってきました。おすすめの収蔵作品や、展示中の作品、あるいは展示履歴まで検索できる場合もあります。当館でも平成23年4月1日からオンラインで作品検索が出来るように準備をすすめ、本年度いっぱいをかけて膨大な収蔵品リストの確認、訂正、記入といった作業や、画像の撮影、スキミングといった作業を行ってきました。所有権や著作権の関係から、ネットで検索できるのは岡山県(当館)の所蔵する作品が原則ですが、当館ホームページからも入ることができるので、いちどのぞいてみてください。意外な所蔵作品が見つかるかもしれません。

…でもでも、本物の作品がもつ、微妙な色合いや奥行き、大きさや小ささは小さなモニター画面では伝えきれません。これはやはり、美術館へおいでいただき本物と対面していただくためのツールとしてご利用いただければと思います。

※画面は現在デザイン中ですので、変わることもあります。

【主任学芸員 中田利枝子】



クイズラリー 好評実施中です



当館に事務局を持つ、岡山県博物館協議会は、昭和163年に県下の博物館が相互の発展を目的に結成されました。現在は76の加盟館で活動を行っています。

ただ今協議会では、国民文化祭に合わせ、また来年度の協議会20周年を記念して、2010年9月～2011年5月31日までの期間中に「76博物館クイズラリー」を開催しています。ラリーシートは岡山県博物館協議会に加盟する76館の窓口に用意しており、その76の美術館・博物館に入館する際に、館ごとのクイズに答えてスタンプを集めていただき、スタンプの数に応じて豪華景品が当たります。ラリースタンプ5個で『Pentel 0.7mm 三色ボールペン』、ラリースタンプ76個で『加盟館優待券(1年間有効)』をもらえプレゼント!また、他にも抽選で素敵な賞品が当たるなど、豪華な企画となっています。

開催期間も残り迫ってまいりましたが、まだまだご参加間に合います。是非この機会に、今まで行ったことのなかった美術館・博物館にも足を運んでいただき、各館のことも知ってもらい、皆様に岡山の博物館をより身近に感じていただけたらと願っています。

クイズラリー76館は、県下の備前・備中・美作地区の3エリア各館に立ててある『のぼり旗』が目印です。たくさんの皆様のご参加、お待ちしております!

【学芸員 尾崎 碧】

岡山県立美術館をふりかえって



退職です。お世話になりました。ありがとうございました。学芸員生活にいったん区切りをつけます。大学卒業後、1年間の高等学校教諭時代へ経て、1978年4月から博物館、85年からの美術館開設準備事務局、88年からの美術館と岡山県で学芸員として勤務して、今では県下現役最古参になってしまいました。とりわけ美術館では建物の実施設計の段階で携わって以来、施設・設備の整備や殆どの展覧会に何らかの関わりをもって動いていましたので、やっと年季が明けるという気分です。

館長以下、総務課・学芸課を問わず先輩、同輩、後輩に恵まれ、ボランティアや監視員、警備や清掃や空調や電気などの担当者に助けられ、収集、展示、調査、修復といった分野で内外の多くの協力者を得て、幸せな学芸員生活を全うさせていただいたと感謝しています。良い思い出は尽きることがありません。できれば後に続く仲間たちにもそのような気持ちを実感してもらいたいと願うところですが、近年の厳しい状況がそれを許すかどうか、少々不安です。

4月からは、吉備国際大学文化財学部において博物館や文化財関係の講義と実習を担当します。県立大学での非常勤講師歴が役に立つことでしょう。そこでは文化財が有する意義や意味を理解し、博物館を上手に活用する人材や実際に修復作業に従事する人材の育成に努めたいと思いますし、一人でも多くの若者が博物館を好きになってくれたらと願っています。と同時に、浦上玉堂を中心に岡山の近世画壇の研究に取り組み、何らかの形でまとめたいと考えています。

とはいえ、完全に県美との縁が切れるというわけでもありません。特任学芸員という立場で週1回程度、館に勤務することになります。展覧会も担当します。「生涯一学芸員」という念願が達成できるようです。ただし、いつまでも古手が口を出すようなことでは美術館に未来はないと心して振る舞おうと決めています。教えられることに慣れて馴染んでしまっただけでは、学芸員は失格です。モノとヒトから能動的に学んで得る喜びや感動の大きさは例えようがありません。物事がうまく運んだら誰かのお陰で、失敗は自己責任。でも、組織ですから自分一人に責任を負うことは不可能です。しかし、「責任者出てこい!」といわれるようになったら、学芸員は「責任者は私です」という気概をもって堂々と立ち向かってください。では、みんな頑張ってください。

【副館長 守安 収】



岡山県立美術館に勤務して23年、開館の二年前からですからずいぶん長い間お世話になりました。多くの方々に助けて頂いて、ようやくゴールに辿り着けたという感じ、ただただ感謝の念で一杯です。多くの展覧会に携わり、印象に残っている展覧会もたくさんありますが、この間社会は大きく変わり、美術館を取り巻く環境も変わってきました。個人的にはIT環境がその存在感を増してきて、書類を作る、情報を探すなどパソコンに向かうのが仕事ということになり、仕事のスタイルそのものが変わってしまったことが一番印象に残っています。私の世代では、ワープロからパソコンへ、スライドからプロジェクターへ、手紙からメールへといった具合で、今やITツールは生活になくはならないものとなり、美術館でもその存在が大きくなっています。当館でも収蔵品検索システムが立ち上がりとしています。今後ますます必要になることは確実で、学芸員はこの新しいツールを使いこなせないといけない時代になってきました。私は新しいものは好きで関心はあるのですが、頭が付いていかず、使いこなせるとはとても言えません。これまで時間と人手がかかっていた仕事を素早く確実にやってくれるので、便利ではあるけれども、学芸員の仕事もますます複雑になり増えていくでしょう。これからの益々加速的に変わっていく、将来どうなるのかは見通せない状況ではないかと思えます。そんな訳で、これからの美術館を担っていただく若い人たちにどのような助言を残せばよいのか、困ってしまいます。

私個人の仕事としては、洋画担当の学芸員として主に海外展や近現代美術の展覧会を担当してきたわけですが、岡山の洋画の研究では、特に国吉康雄と坂田一男に力を入れて取り組んできました。まだまだ汲みつくせない研究課題を残して去るのは残念ですが、しばらくは美術館と繋がりを保てますので、ぜひ次の世代に引きついでいただければと願っています。ここには素晴らしい宝の山が埋もれているということで、資料は蓄積されつつありますし、これらを生かして、広く多くの人々に彼らの仕事を知っていただきたいと願っています。

デジタル化された情報も有益ですが、なんとと言っても美術館は絵画や彫刻といった「もの」を扱う場所であり、それらの「もの」の価値を明らかにし、高め、次代に伝えていく使命があると思います。岡山県立美術館が今後も多くの方々に愛され、親しまれる美術館として発展していくよう願わずにはられません。

【学芸課長 妹尾克己】